小さな変化、大きな流れへ

（持続可能な未来社会に向けた私の実践）

ソニー教育財団×ぐうたら村「保育実践ゼミナール」

聖学院みどり幼稚園　　国府田郁絵

1. 聖学院みどり幼稚園

聖学院みどり幼稚園は、埼玉県さいたま市西区に所在し、創立 45 周年になるキリスト教を基盤とした、遊びを中心とした保育を行っています。自らの思いに誘われて、自分自身の体験を積み重ねていくときこそ、選ぶこと、挑戦すること、考えること、達成すること、悩むこと、妥協すること、調整すること全てがその子のものになる（パンフレットより）ために、子どもの心は子ども自身が動かしてほしいと常々感じています。

遊びは、その子どもらしく（自分らしく）輝いているということですし、自分らしく輝く命同士のつながりの中で、自分の世界を広げていていってほしいと願っています。

そのために、様々な視点が考慮された遊びの環境や、じっくり保障される遊びの時間や、遊びの主役である子どもたちの心を楽しむ大人の応答、という視点から、保育のカリキュラムをたて、一日を振り返り、子どもたちの姿や遊びを報告会で共有したりしてきました。

2. 新しい気づき～　区別するのではなく一部分として捉える

保育実践ゼミナールへの参加を機に、保育の見方を学びほぐし、学び深める場と出会いました。ぐうたら村での実践は、自身が、一つ一つが意味のある命の営みに囲まれ、自分も同じ命を営んでいる“ひとつ”として、そこにいるということを感じる機会をいただきました。その出会いを、一部分でも自分事として捉えていきたいと感じました。そして、捉えた一部分が、意外と全部につながっているのではないかと感じたりもしていました。

聖学院みどり幼稚園の“広々とした自然豊かな園庭”は、入園の決め手にもなる大きな特徴でもあります。自転車で走り回ることができるほどの広さ。1 年を通して、実りを味わい、草木で遊び、虫などの生き物に出会える自然豊かな園庭です。

そのような園庭を、これまでは、遊びの大事な環境の一部で、保育者が、その園庭で起きる子どもの姿や遊びに目を留め、保育者が、“様々な視点が考慮された遊びの環境”を、子どもたちへ用意することが大事だと考えてきました。ですが、ソニー保育実践ゼミナールによる、ぐうたら村でのフィールドワークで実際に感じることで、この自然豊かだと思っている園庭へのまなざしも、実は保育環境の一環として考えている対象物として区別されているのではないか。その子ども自身が、また私たち自身が、生きることの部分として園庭という場所で何が見えているのか？と問われると、そのような見方、考え方はこれまで感じたことがなかったものだと、衝撃的な思いがしました。

（フィールドで感じたこと）

草も木も鳥も虫も人も、それぞれにそこにある意味（命）があること。

育つも老いるも、動いた後も朽ちた後も、それぞれに命のリズムと営みがあること。

命を使うこと、命がつながっていること、命で起こること。

子どもの育ちと命の出来事は同じ？なのではないかということ。

3. 気づきを実践へ、実践からの気づき

少しの違和感を覚えたからには、やはりこのままではいられず、保育の環境としての見方ばかりだったみどり幼稚園の園庭を、命あるものが循環するという視点で見直してみたいと強く思うようになりました。とはいえ、ぐうたら村で感じたことを、目の前の保育の中で展開していく術のアイディアも工夫もなかなか見えてきません。

そこで、まずは、出来そうなことから見様見真似で取り組んでみました。※お庭で育つ会という休園日の企画にて、子ども・保護者に見てきたこと聞いてきたこと、感じたことを伝えたのち、それらを一緒に作る活動をしてみました。（エンカウンタースペース、うさぎの広場、バイオネスト、落ち場の溜まり場作り）

また、自分の興味が留まる何かをやってみようと思った担任が、まずはその出来事を、クラスの子どもを中心にして取り組んでみました。保育者は、2023 年 4 月に一日研修で初めてぐうたら村を訪問させていただいた経験があります。（バグホテル、液肥、コンポスト、種のこと）

これらのことは、慣れない私たちがそれを知れば知るほど、やってみるほど、同じ分量の混乱も伴うことが現状です。ですが一方で、まずは取り掛かってみたことで、たくさんの子どもの姿や言葉や思いに出会うこととなりました。

1，エンカウンタースペース（そぉっとのとびら）

意図的に出会える（かもしれない）場所で、自分から働きかける子どもの姿に、興味の持続や広がりを感じました。

2，コンポスト

子どもたちが自ら働きかける姿や言葉を見聞きし、子どもの感覚の豊かさを改めて感じることができました。「（コンポストに顔を近づけて）カブトムシの匂いがする！」「（手を土にあてて）ここはあちちのお風呂だ。」「（初めて触れるやわらかな糠を巻きながら）ごちそうどうぞ～。おいしいね！」

3，バグホテル（むしのおうち）

実際は、虫たちが表れにくくなる秋の始まりとともに取り組み始めたことなので、バグホテルに虫たちがいる気配はなかったのですが、“虫がいる！”ことだけではなく、“いない”ことに

思いを馳せる子どもたちの姿が見られ、予測や希望と違うことを体験するおもしろさを、私たち大人も感じました。

４，液肥

身近な園庭の草や土で、何か有益なことが起こることへの期待は、子どもたちの楽しみの一つでした。楽しいはずの液肥つくりは、ほとんど、「楽しい、けれど不快（ちょっと匂う）」なのですが、期待と困りごとを同時に感じる子どもたちが、それを受け止めて自分なりに目の前のことに関わる姿に、新鮮さを覚えました。

５，たね集め

今回は、ただただ実り（ここまで来た種、ここから始まる種）を集めただけですが、園庭で、種を集めるという意味が、みんなと繋がっていました。子どもが何か（誰か）につながることを喜んでいました。

それらの実践に取り組んでみることで、やってみることの豊かさ、実践の意味とは、作り上げる達成感を味わうことや成果をだすことではなく、目の前の出来事に子どもたちが自分なりに心を動かすことなのではないかと感じるようになりました。本当の意味で豊かな園庭とは、遊びを展開する環境として区別されたものではなく、自然そのものの息遣いをその場で子どもたちが感じ取ることのできる環境となることではないか、と考えるようになりました。

4. コトの共有～出来事と自分の往還

子どもたちが目の前の出来事に自分なりに心を動かすことは、聖学院みどり幼稚園の先代の保育者たちが、常々大事に考えてきたことです。けれども、気付きからの実践、実践からの気づきを通して私たちは、保育をどのように捉えていくかという視点を、もう一度見直す感性をいただいたように思います。

A 保育者から子どもへ

保育者が事前に準備して、子どもに出来事を提供するという視点が強かったものが、その出来事自体を子どもと一緒に進めながら、提供したいと感じる環境や活動を共有するという、保育者の見方が加えられはじめました。子ども中で、一緒に保育（活動）を進めていけるのでは？とまず考える。

B 幼稚園から保護者へ

幼稚園が「子どもたちの育ちを幼稚園で担う」、「育ちを教育現場で囲う」、のではなく、集まった子どもを囲む大人たちが、ともに彼らの育ちを楽しむ場所になるようにと考えるようになりました。

・お庭で育つ会の開催～月 1 回、休日開催、園庭のいろいろをみなで一緒に活動する。

・保育（育ちの場）に関わってもらえる機会を増やす～苗植え、収穫、掃除、保育教材作り等

C 子ども（育ち）へのまなざし

今、目の前で起きていることを一緒に、今、目の前で考えていきたいことを一緒に、大人と子どもが共有しようとすると、互いの思いが伝わりやすくなりました。その結果、私たち大人が、幼稚園か家庭か、保育者か保護者かというカテゴリーではなく、子どもの育ちを分かち合うものとして子どもの育ちを考える（学んだ言葉で言えば、一人称で自分のことを語る）、そのよう機会や提案が増えてきました。目の前の子どもたちもために、子どもたちと一緒にしてみたいことを思いめぐらせる保育者や保護者が、増えたように感じます。

・H さんのイチジク持ち込み～M さんからのお花の提供、U さんからの枇杷茶作りの提案園庭で育ててみてはどうだろう。子どもたちや幼稚園のみんなでやってみたい。

・K さんのワークショップ～自分のスキルを活かした絵画教室開催の提案。お庭で育つ会でワークショップを実施。

・M 先生をきっかけとした地域のつながり～子どもたちの遊びの様子から、つながりのある人形劇グループの紹介

D 自分なりの意味を見出す

ソニー教育財団さんにいただいた機会と、これらの時間を通して、起きている「コト」と子どもの毎日が、連動していることへ気づきました。そして自分のコトとして動き出したところには、一人ひとりにとっての大事な意味があることを改めて感じています。それは、子どもたちのひと時でも同じです。

i. 液肥の子どもたち：時期になって実るたわわのゆずを使って、クリスマスの飾りを作っている横で、「このゆず、俺たちが育てた！」と誇らしげ。

ii. バグホテルの子どもたち：寒くなってしばらく虫がいないな～幼虫見つけた！虫のおうちに入れよう～テントウムシ見つけた！おうちを引っ越そう！

iii. Y 子のイチジク茶へのこだわり、K 男が見た母の姿から Y 子への提案
親の姿が子どもの生活の中で支えのひとつとなり、その嬉しさや誇らしさで子ども自身の活動が力づけられる。

iv. 遊び～つながり～遊び：ボランティアの方が演じてくれたテーブル劇を経て、子どもたちの遊びがより広がり深まっていく様。

★大事なこと★

大事なことは、自分の心を自分で動かす！自分らしく輝く！自分の世界を広げていく！そして、過ごしていることに、自分なりの意味を見出す！ことだろうと今、感じます。

さらには、これらのことを子どもたちは、自ら当たり前のように見出す力をもともともっていて、実は毎日、当たり前のように、自分の意味を楽しもうと、そのように過ごしているということではないかと、感じています。

5. 私たち、聖学院みどり幼稚園のこれから

★人が集まる場所として

・集まったみんなで、同じ「時間」、同じ「コト」を共有すること。そこで、自分の意味を自分なりに見出して過ごし、同じように自分らしく過ごす他の人の意味に出会う場になりたい。

・比べるのではなく、それぞれの自分らしさが、そのままで幸せなことを互いに共有できる場所になりたい

・成果でも結果でもなく、そこで人が集まり、コトが起こってること

そのものを楽しむところでいたい。

★子どもたちに巻き込まれて大人も幸せに

・コトが起きるその場所で、だれもがひとり一人が自分の意味を自分で見出しながら、いちいちワクワクしていきたい。

・子どもたちが幸せに過ごしているコトを、大人が感じ、関わり、ともに共有していくことで、私たち大人も幸せでいたい。

・私たち人間が本来持っている生きる力を、子どもたちの姿や育ちから学び、そのことを信じて、一緒に支え、つながりあえる仲間と、一緒に過ごしていきたい。

そんな幸せな時間が、まずはここみどり幼稚園から広がって、繋がって、巡っていけば、きっと子どもたちが育つこれからの社会が、もっと幸せになるだろうと思います。

今回、このように保育実践ゼミナール参加というソニー教育財団さんにいただいた機会を、これからの原動力に、私たち聖学院みどり幼稚園は、今後もじっくり経験を積み、実践を学び、つながりを広げ、夢を見ながら、子どもたちの育ちの場を、多くの方と分かち合い、大事に考えていきたいと思います。

【今後の企画、見通し、希望する活動等】常設かまど　道具小屋の設置　築山作り（丸太、つちもり）　庭のでこぼこ作り　園庭植物の見直し　麦育て　米作り　さいたまマラソン参加、夢見る小学校上映会、大豆生田先生講演会、保護者ぐうたら村訪問会　等